

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	先端社会研究所
大項目	4 教育研究組織
中項目	
小項目	4.0.1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
要素	教育研究組織の編制原理 理念・目的との適合性 学術の進展や社会の要請との適合性 (KG1)研究活動の状況
小項目	4.0.2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
要素	

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 研究所の活動理念としてresearchとempowerment、実践目標としてNetworking, Education、活動事業としてarchive, publication, workshop, S-cubeをそれぞれ置く。	→運営委員会による研究所の活動計画・実施状況・成果発表に関する評価の実施。	B	B	B	B	B
2. 学部・部局横断的な研究・教育体制のもとで、「共生/移動」「景観/空間」「セキュリティ/排除」を三つの柱として関学らしい学際的な研究業績の発表を目指す。	→リサーチコミティをはじめ複数学部・研究科に所属する教員による研究体制・グループの構成状況の内訳。「ミッションステートメント」に合った研究の実施状況。	C	C	B	B	A
3. 海外との学術ネットワークの構築に基づき、「共生/移動」「景観/空間」「セキュリティ/排除」に関する国際的な研究組織・体制を確立する。	→海外との研究教育機関との協定/協力関係の状況(実施件数)。研究者の海外からの受入れと海外への送り出しの実施状況(実績数)。	C	C	B	B	A
4. 国内の関連する諸機関・組織との協同体制の確立に基づき、「共生/移動」「景観/空間」「セキュリティ/排除」に関する学際的かつ実践的な研究体制を確立する。	→大学外の諸機関・組織との学術交流・研究活動の状況(研究会・交流会の実施回数等)。ワークショップやSキューブの開催・実施状況(実施回数、共催相手数、等)。	B	B	B	B	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 運営委員会を9～10回/年開催し、研究所の活動計画、実施状況等に関する審議・報告を行った。また、3ヶ月毎に活動状況報告書を研究推進社会連携機構へ提出し外部からの評価を得ている。特に2012年度は学長より依頼を受けた研究推進社会連携機構による事業評価を受け、それに基づき学長による評価が出された。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学長による評価は本研究所の改編を求めたもので、結果として2014年度以降は予算規模の縮小という形で研究活動を継続することとなった。なお、大学院教育支援事業に関しては高い評価を得ることができた。これを受け、各研究プロジェクト班において今後2年間の研究計画を再考する機会となったことに加え、本研究所それ自体の研究活動を考えるための「先端企画セクション」を設けることとなった。なお、同セクションによる予算により大学院教育支援事業も継続することとなった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 予算規模の縮小という形で研究活動を継続することとなったことを受け、各研究プロジェクト班においては今後2年間にわたり各班からのまとめとしての成果物の作成やシンポジウムを開催することとなった。また、「先端企画セクション」においては、限られた予算規模を最大限に活かし、効率的に広範囲な広報を行い研究活動の成果を還元していくこととなった。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 指定研究として「アジアにおける公共社会論の構想―「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査―」として3つのプロジェクト研究班のもとに研究所としての研究活動をおこなった、これに加え2013年以前には公募研究として全学に広く呼びかける形で募集した。また、各研究班の進捗状況や活動状況に関しては、定期的開催されるリサーチコミティに於いて報告と協議の場を設けた。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 各班における研究体制は、社会学部教員が主体であり他学部教員の増員が望まれる、なお、日本班は人間福祉学部・文学部等の教員により構成され、公募研究は法学部、国際学部の教員によるものが採択されたことより、学際的な視点で取り組む努力はしている。成果については先端社会研究所紀要を年に2冊刊行しておりこの場で発表している。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 各班における研究体制は現状を維持することとなるであろうが、これまでの成果をまとめ発信していく必要がある。国際的な共同研究や調査を行う体制を整えている班もあるので、今後もリサーチコミティ等での意見交換・班内での意見交換を行い、シンポジウムの開催等、積極的に研究成果を発信していくことを考えたい。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 「アジアにおける公共社会論の構想―「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査―」として設けられた3つのプロジェクト研究班のうち、中国国境/雲南班においては雲南社会科学院との共同研究会を開催したり共同で現地調査を実施した、日本班も、済州大学校在日済州人センターとの共同シンポジウム・共同調査に取り組んで来た。他にも2012年度公募研究「戦争をめぐる女性の歴史的エージェンシーに関する比較研究―第二次世界大戦期における日本人女性と中国人女性の表象」に関連しオランダ戦争資料研究所(NIOD)とも学術交流を行い、国際ワークショップ等を開催した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2014年3月には中国国境/雲南班は雲南社会科学院との共同研究をより円滑に行うために共同研究契約を締結、また、2014年4月には、日本班も済州大学校在日済州人センターとの学術交流協定の締結した。これらの効果については今後の研究活動に反映されると思われる。南アジア/インド班においても専任研究員を中心に積極的に現地調査を行っている。なお、オランダ戦争資料研究所とも学術交流を進めてきており、同研究所に於いて開催されるカンファレンスに参加・発表を行った。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 締結した共同研究契約にもとづき、積極的に研究交流を実施していくが、予算規模も縮小しており、より効率的な現地での活動や協定先の研究機関とE-mail等の通信中断を用いた交流も一手段ではないかと思われる。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆

目標4	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 研究所の研究成果を一般に公開し、また、社会の声を研究に反映させるための双方向的な研究交流の場として中国国境/雲南班による写真展「雲南の現在」や『『赤い家』の真実－戦争被害を語り継ぐ－』を開催、他にもシンポジウム「関西私鉄文化を考える」「グローバリゼーションと他者問題－現代日本・韓国・オーストラリアの排外主義」等を2～3回/年開催。各研究班および研究所主催の研究会は10～12回/年開催した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か シンポジウムにはパネリストとして他研究機関の研究者やジャーナリストなども招聘し研究成果等を交換することができた、また、一般聴衆に対しても学際的な視線からの意見を還元することができた。研究会においても他大学・他研究機関の研究者を招聘して実施、同様に外部の意見を交えた上で活発な質疑応答を通して、各プロジェクトの研究を深めることができた。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 学外の諸機関・組織との研究交流、活動の交流はや研究会における学外者の招聘など従来どおり進めて行くことは当然として、直近年度においては、研究所の存続問題もあり、ワークショップやSキューブの開催が減少している。「先端企画セクション」設置に伴い、この機動性を活かし様々な発信を行って行く必要がある。	☆
		その他	☆
備考			☆